N-47

64
227

折中喪儀略

全

特49 W2-4214/23

931

折中喪儀畧序

古哲曰愼終追遠民德歸厚矣宜哉言也夫世間有生則有死是天定理而所不免也人萬物之靈也乃不可不知修終焉之道也故古今萬邦必有喪儀式典焉其禮之重可知也本邦葬儀式所傳舊矣雖然中興混淆於儒佛之式而或失於雜或失於疎有志者以爲憾我德島縣人木匡卿氏憂之有年涉獵古今諸書斟酌折中著一書名曰折中喪儀畧」此書也繁簡得中無遺漏是則使人知我固有古式喪儀又可以知愼終追遠典儀也將使孝子順孫盡其儀得其道凡稟生於本邦者死則行本邦喪儀式此得其道之正者也況於神官教職從事於其道者豈可忽諸哉孝子之於父母於親戚於朋友始無遺憾也八木氏爲人溫厚愼重博文篤學通本邦古典精祭典及喪

儀式乃是追遠令民德歸厚之意可感可賛也余之於八木氏交誼已舊今也將發刊此書徵序文於余々雖不敏謝劣喜如此好佳編出干世肅然而述一言爲序

明治廿三年庚寅春三月上浣阿西高靜書屋

聰下

少教正　三木　整撰

凡例

一神葬祭の書數多ありと雖ども いづれも事繁きものゝみなれば資力乏しき者は失費を厭ひ或いさらでも其れを取捨せんと欲する者あらんなれども其事甚だ煩はしきに似たれば遺憾に思ふ人もあらんとて今拙中興儀略を編輯するものなり

一此書專ら中等社會中等といふ家産あれども富にあらず貧にあらず以下貧人の執行ふ所を主とする故ゑ諸書中より簡易にして失費の少なきしかたを取りて組織したるものと知るべし

一祭文は古言體にても漢文體にても漢文にても祭官の隨意たるべし然れども祭記の度毎に新たに作る事の煩はしき向もあるべければ心得のためゑとて葬式の諸書中より抜萃しからもやと思ふところ〳〵を摘酌取捨して書き列ね附錄とす

一祭文は貴賤老少男女の別なく普ねく用ゐらるべきを本旨とす

參考書目

日本書紀
歷朝詔詞解
葬喪記
神道喪祭式
神道葬祭儀略
五嗜翁口授葬式
愼終疏節
儒葬祭記
葬禮私考
靈祭要錄
葬祭略式
上等葬祭圖式
神葬私考
靈祭略式附葬儀略式
凶禮略典
諸祭祝詞文例
服忌令
神祇服忌令
德島縣戸籍便要
古事記傳
喪葬令義解
葬送作法
神道喪祭家禮
神祇伯家葬送古圖
儒家葬祭記
追遠疏節
過庭紀談
葬事略記
喪儀要錄
葬事略式
葬祭祝詞集
諡號考
黑住教葬祭略式
葬儀式
祝詞文例
禁裏方服忌令
元錄服忌令
古吏傳
喪葬令集解
舊事紀
神道葬禮式
葦齋翁答問書
愼終略
長思錄
喪儀略
渡部氏建議
喪儀次第大略
庶人喪儀式
折中葬祭式
葬儀心得大意
大社教葬祭式
明治葬祭祝詞
設奠諄辭
御窺服忌令
服忌要輯

八木匡則編輯

一爰に病者あり醫療を盡すと雖も遂に危篤とならば家の內外を靜かにし若し言ひ置くべき事あらば之を聞き大事ならばこれを書き置きて猶も看病を肝要とすべし既に息絕へたるを悲しみ其子又は至親の者衾を披き哀を擧げて永訣を悼み訪ひたる親友も夫々の愁傷を述べ哀情を盡すを終焉と定めて葬儀に從事すべし

一病者息絕て後は病床のまゝ廿四時間遺體を動かさず上座を枕にして面に白布を覆ひ仰向に臥さしめ其枕邊に守刀或は守鏡等を置き廻りに屛風を建て廻らし（但し屛風を逆に建る俗習あれども之は三月以上淺水盥等を供へ夜は燈を點し親族代るがわる附き添ひ側を離るべからず緻經念佛題目陀羅尼の類一切禁止すべし

一常の如く建つべし之を所持せざる貧者は建るに及ばず）案を設け折敷炎熱の頃又は病症に因り石炭酸或は水を器に盛り置くべし是れ遺體を損ねざらしむると惡氣の傳染するとを防ぐが爲めなり惡臭あれば別に香を燒くべし傳染病なれば豫防法を嚴重に行ふべし

一病者命終らば（無服の人をして家の神棚の扉を掃ひるか或は淸淨の紙以て覆ひ忌明に至りてこ

れを除くべし）地方の定規を履み届書を出して埋葬認許証を乞ひ墓地管理者へ届くべし

一親戚朋友の未だ來會せざる者あらばこれを告げ知らすべし

一葬祭の式法は神道の地方分局支局教會所又は最寄の教導職へ速に依頼し葬儀を行ふべし

一教職たる者喪家より葬儀の事を頼み來りたらんには事狀を詳細に問ひ官の制度に悖ることなく順序を經たらんには速に承諾し分限に應じ葬祭の式法を示し且つ事に熟練たる者を撰びて豫く喪家に差遣はして豫きに事物を整へしむべし

一教職たる者喪家の依頼に應じ葬儀を執行はんに其式の輕重は喪家の貴賤貧富によりて等差あり

と雖ども死者の靈魂を導きて幽府に歸せしむるは專ら教職の與るところにして輕重の差別あるべからず故に教職たるもの常によく此道理を心にしめて懇切を盡し喪家をして毫も遺憾なからしむべし

因に云神葬とは我國の風儀にして葬祭を行ふを云我が國の古風は葬祭のみならず諸事煩しからず質素に簡易なりしを儒佛の教渡り來てより華侈をのみ尚ぶ事とは成りたりされば葬祭も古昔に復し簡便にしてしかも手厚く行ふべき事第一の心得なり世には死者を神と崇め尊び祭事を盛にせむとして却て實意を失ふ弊なきにしもあらず能よく本に立かへり悲敬哀戚の情を忘るべからず

一喪主を（喪主とは葬祭を主管る人をいふ）定むべし父母の喪には其長男則ち相續人喪主たること勿論なり妻子兄弟姉妹其他一家族にも血胤の遠近を問はず戸主は喪主たるべし但し父母の喪といへども長男病に臥し或は去り難き故障あらば次男以下親族の中代りて喪主となるべし

一喪主は悲哀に堪へず諸事行屆かざれば親族近隣なぞの中にて事馴れたる人に萬事を任せ置き自分は葬事のみに心を委ね居べきなり世俗の習はしにて他人に飲食を馳走するなぞに拘はりて哀を忘るゝは不孝に當る事と知るべし

一葬儀の器具を造らしむべし（卷末に其品目及び圖を載す見合すべし）

一人を遣はして墓地を見立其所に酒を注ぎ拜禮し扨壙を堀ることなりこれは此の墓を長く守り給へと土地の神に祈る意なりとす

一遺體を棺に斂る時は喪主以下遺體に一禮し慎みて靜かに取扱ふべし死體を赤裸にして沐浴なぞするは其人を恥かしむる理なれば然る事はすべからず何ばかり洗ひても眞に清淨にはならぬものにて携はる者は深く汚るゝことあればなり（併し死體に汚垢ありて人情止み難くは手巾或は海綿を湯に浸してしづかに拭ひ去るは苦しからず）又死者を長く留め置き臭氣なぞ出むも亦其人の恥なれば其心配もあるべし（凡そ死相を他人に示すは是亡者を恥辱を與ふるなり況して裸體をや維新前重き罪ある者の死骸を曝されしは卽ち恥を示されしなり是にて解るべし近頃容

棺とて諸人を臥内に呼び入れ死體を裸形になして水浴するは有るまじき事なり以後は堅く廢すべし）

一遺體を棺に歛むる人は近親に限べし新衣を製り（貧者に有るに任すべし）舊衣の上に加へ棺内に新褥を施し遺體を靜かに歛め充璽、籾、茶、鬱麥殼の類を紙袋に入るゝを以て堅く塡めて蓋をしめ合せめに漆青を塗るべし（死者相當の禮服を着せしむるも家の貧富により他の衣服を用るも妨げなし）但し靈主鎮祭の席とは異なる所にてすべし然りといへども家狹ければ其一間にて入棺する事も亦不得止のことゝす

一棺内に收むる物は髮、脫歯、臍緒、其他生時に手馴たる品物を納むべし然れども金銀銅鐵の類或は通貨幣なども決して納むべからず

一棺に歛め終れば帔を掛け席上に新薦を敷きて安置し前に饌案を居ゑ左右に榊を立酒、洗米、水、鹽、野菜、海草、魚類、菓子、菓物等を供へ（又他より贈物あらば別に案を設けて供ふべし）夜に燈火を點し親族の内一人づゝ離れず付添ふべし又棺の表には最初より印を付置き出棺の節逆にならぬやうにすべし

一死者に酒魚類を供ふとも家族及び會葬人の膳部には酒魚を用ふべからず弔者の酒に醉ひて弔ひの禮を失ふ事もあればなり恣に肉を食ひ酒を飲み無頼なるを神葬と思ふこと勿れ父母子弟近親に更なり立會する人の心得も人の喪に遭ひて哀情なきは人たる者の道にあらず

一別間を洒掃し上座に新薦を敷延へ其上に高案を居ゑて新製の靈屋を置き左右に垂着けたる榊を立其前にまた案を設けて鹽水に榊の小枝を添へ備へ置き又別所に供物を調成し置き惡靈の後靈主を鎮祭するの設けとなすべし（但し家狹ければ死体のある間にても苦しからず併し屏風か障子かを以てこれを隔てゝ注連繩を張り置くべし）

一用意整ひたらば惡靈式を修行べし齋主盥嗽して靈主に死者の姓名を書しこれを靈屋の前に安置し祓主祓詞を誦み祓を修し訖て齋主靈主を持ちて櫃前に到り案上に置きて惡靈詞を宣り靈魂を靈主に遷して豫て設け置きし靈屋に鎮祭し供物を奠へ鎮祭詞を宣り喪主以下親族各々玉串を供へ拜禮あるべし

一靈號に實名、詞名、漢語名等隨意たるべし男女によりてその書き樣あり下に記す見合すべし

一送葬に先だつこと凡一時間ばかり出棺式を行ふべし（饌物等豫て具備す）喪主及び親族の男女服を改め祭官の式場に臨ひを待て列坐す祭官饌物を奠へ齋主出棺の祭文を告り喪主以下親戚の男女各玉串を供へて拜禮し訖て祭官饌物を撤し而して行列の準備をなさしむべし

一送葬に夜中たるべし事の宜に從ひて畫これを行ふ事あらばなるたけ黄昏にすべし

一送葬の行列に式の輕重によりて增減あるものなれど中等社會以下にしては概略左の如し

高張
高張（郷中ハ松明）　幕　杖　赤旗　供物櫃　調饌師　銘旗　生花　榊　高張
幕　杖　白旗　生花　榊　高張

棺　齋主　祭官數名　墓標　喪主　近親　親族　會葬人　雜具人夫

かくの如き貧者の幕、杖、赤白旗、供物櫃、生花、榊等を省き高張も一張のみ用ふべきか此等は身分相應に計ふべし

一夫れ送葬は凶事なり親族家人集會して夜中窃かに行ふべき事なるを白晝に他人を集へ喧れがましく振廻ふは何事ぞ數十人を集め一日の費にて家産に差響きをなすに至る者さへありと雖ども必竟名聞の爲めなれば此等の弊風は速かに廢除すべし又今の俗葬送に位牌を棺の前にもたらしやがて墓所に置きて歸るのことわりなし遺骸をこそ詮方なく野邊にの送れ神靈は常に家に止まるものなるを其位牌をさへ野邊に送りてよからめや

一葬送の行列の其身存生の格に應じて定むべし貴きは賤しきと同じく賤しきは貴きに同じき事を得ずと合に見へたれば中等以下の人にていなるべく質素に事を行ふべし他見の飾を好む時は實を失ひて宜しからざれば極めて無益の飾わるべからず

一出棺後門燎を焚き幕を執て家中を掃ふべしいまだ撤却せざる汚物あらば又悉く掃除して淸潔になすべしさて門外に水盥を備へ置き會葬人等歸り來らばまづ盥嗽せしめ盥を以て祓ひ淸めて後家内に入らしむべし

一葬場は豫め土地を撰びて四隅に忌竹を建注連繩を曳廻し中央に瓮瘞を敷き式場を設くべし

一行列葬場に到らば弔葬人等を左右に列せしめ中央に瓮子を置き棺を舁据ゑ紅白旗、銘旗、墓標等を棺の後へ列ね幕、榊、生花、高張等を棺の前左右に樹て正面に高案を設け供物を奠へ訖て齋主棺前を距ること凡そ一歩に進み告文を告り玉串を採りて拜揖しそれより喪主以下親戚會葬人等順次に玉串を供へ拜禮訖て供物を撤して後棺を葬場に轉すに及び祭官會葬人等隨意退散す此時親族の内一両人便宜の處へ出で會葬人へ挨拶あるべし

一棺を擧げて葬場の邊りに移し祭主一拜しさて棺を場中に納め祭主土を取て三度場中に散らす後さて葬夫四方より土を掩ひ終て棺の眞上を圓形に土を築きて奥津城とし上に墓標を建て四隅に忌竹を建て注連繩を曳廻らし墓前に榊を樹て小案に洗米水盥を供へて祭主以下拜禮訖て麁木のなきやうに丁寧に檢察して退去すべし（此時墓所に着し草履草鞋は脱弃て去るべし但し近來妻子弟姪等後嗣の喪を送らぬは吾が淳厚の古風に甚く背けり）

一家に歸らば先づ門前にて盥嗽ぎ塩ばらひして家に入るべし

一家に入らば靈ヨの前に酒饌魚蔬菓鹽水等を奠へ喪主以下順次拜禮あるべし

一喪中ハ愼しみ肅み墓參の外ハ猥りに他行すべからず然りといへども無祿貧窮にして止むを得ず營業の爲め外出する事は又此限ヨあらずといへども十日祭（此事次條にいへり）を終るまでハ必ず忌み憚りの用捨あるべき也

一歿日より十日に至らば酒饌を厚くして親戚打集ひ靈祭すべし此祭りは第三日若しくハ第五日に取越して祭る事も妨げなし以後は二十日祭三十日祭四十日祭五十日祭と十日毎に獻供して靈祭をなすべし奠物ハ酒飯魚蔬藻菓鹽水榊時花等を供ふべし但し平日は白飯淨水を供ふべし

一忌明に至らば早旦家の內外を掃除し火水を改め一同浴湯して身を淸め靈主を移して家廟に安置し神饌を奠へ合祭式を行ふべし此日神棚の封を解き始めて神前を拜す但し父母の喪には五十日を過て合祭すること勿論なれども家族の內にて速く忌明に至るものも五十日祭まで事竟て後合祭すべし

一百日の期に至り家廟にて靈祭すべし此日墓牌を建て墓標を除くべし若し事故ありて後るとも一周祭の期を過すべからず偖奥津城を造るべき形ちハ土を圓形に築立其廻りに耳石にて丸く築あげ墓牌を建つべし又普通の石牌の形にするも妨げなし共に委しく卷末に圖を記せり

一毎年正辰（死者命終の本月本日を云ふ）にハ家廟ヨて靈祭を行ふべし（別に祭場を設くれば更に佳とす）父母の忌日は終身の喪として生涯堅く愼しひべし前日より家廟を掃除し墓所を拜し前夜より酒肉を止め音樂を爲す諸の遊宴に赴かず獨宿し黎明に酒飯魚蔬藻果の類を奠へ拜禮し終日籠居して外出すべからず（父母の忌日ハ奉公に不隨神事佛事に關らず）

一式年祭は一周祭三年祭四年祭五年祭十年祭二十年祭三十年祭四十年祭五十年祭百年祭以後五十年毎に之を祭るなり其祭事ヨは靈主を家廟より家內の淸き所ヨ廻して大祭を行ふべし（但し都合を以て家廟にて祭る時ハ其人の靈主を正面に建て祭るべし）生辰祭式年祭ハ凶祭なれバ親戚相集りて祭具を捧げ亡者を追慕し哀傷痛悼の心を以て祭るを主旨とする事なれば設りに酒宴猥雜の行ひ有るべからず

一毎年春秋二季（春分秋分の日を用ふべし）先祖代々と合せて祝祭すべし但し此祭りハ先祖代々より父母に至るまでの先靈を總て祭り慰ひることなれば吉祭に屬するものにして諸事賑ハしく齋ひ祭るべし忌中ハ此祭りを用捨すべし服中なれば其亡靈ヨ對して總靈の祭りといへども凶祭に等しく穩密の祭りをなすべし

一春秋靈祭を行ふ時ハ家の神棚にも神饌を供へて祭るべし

一朝廷御祝祭日月日其餘家の吉事ヨハ必ず獻供して祭るべし

一平日ハ日々白飯、又洗米、汗水を供へて祭り夜ハ燈火を供へ珍美時新ハ得る隨ヨ供ふべし

一吉凶祭ともに親族悉く正服を着し必ず敬禮を盡すべし近來大ヨ禮儀をみだり只に酒宴等にのみ長じて正服を着せず靈前をも拜せず席に着けば卽て酒食を事とする風習あり能々注意して此弊害を去るべきなり

一凡ろ祭は本に報ひ人情を篤くするなれば愼まざるべからず祭の主ハ敬にあり敬なければ實なし敬ハ自ら尽すにあれば祭ハかならず身自ら勤ひべし祭は前日より齋して心の齊しからざるを齊ふるにあり人の妻を娶るハ子孫の爲のみならず祭を助けしひるにもあれば婦をして祭を勤めしめて可なるべし夫婦相隣りて薦めて祭るへきものハ祭り物を尽して誠敬を顯すにあり

一神葬式の者心得違ひにて墓參せず併せて墓所の掃除等をも怠るものあり甚だよろしからず必ず月々三度ゞらゐ墓參し毎年春秋祭の前日ヨは先祖以來の墓地を掃除なすべきなり

一俗に盆とのみ唱ふるは盂蘭盆を略して云なり盂蘭盆とは天竺詞なりこれを字音語に直して見れば施餓鬼といふ詞になるなり是は元來佛說にて目連の母が餓鬼道へ落たるによりてこれを救ふの法事に盂蘭盆會をとて行ひしより初まりしとなりされば七月に限りていふ事にてはなし世俗の暦七月に盂蘭盆會をするも古き事とは見ゆれども畢竟瓜茄子なども出來て農事も隙あり年の中程にて時節もよきゆゑ七月ヨ此事をなせしなるべしされどこれハ施餓鬼なれば餓鬼道へ落

たる先祖あるものゝこれがために施行する事なりかゝれば盆に佛事をいとなむハ己れが先祖を鬼になしたる所作なりとて先賢もかにかく論じ置きたる事なれば神葬祭を隨ハむ人々ハ心しらひすべきなり

一方今天皇陛下總て皇國の古禮に復せられ葬祭等神道を御用ひ遊ばさるれば我皇國内の人民ハ葬祭總て神道に依れば卽ち天皇陛下を遵奉する儀なれば努々神道に隨ふべし

○祭典式通則

先づ豫め清き所に於て左の供物を調へ置くべし

酒（瓶子一對又ハ樽）

洗米（又白飯赤飯等）土器を盛る

鏡餅（一組、下に紙を布きて置く）

魚（大小生魚或は乾魚鰹魚、下に笹或は常磐木の葉を布きて置く）

海藻（昆布、滑海藻、若和布、鹿尾菜、神仙菜の類一色二色下ヨ紙を布きて置く）

野菜（蕪、胡蘿蔔、牛房、茄子、干瓢、山芋、椎茸、松茸、山葵、生姜、大根、辛菜の類、一色二色、下に紙を布きて置く）

時菓（密柑、梨子、柿、栗、梅、桃、枇杷、甜瓜、西瓜、蓮蘆の類、下に紙を布きて置く）

饌菓(有ふ糖、蒸餅、茶菓子、干菓子の類、下に紙を布きて置く)

堅塩(土器に盛る)

浄水(壺又は茶椀に入る)

右何も三方に載す或は折載するも妨げなし

真榊(紅白の絹或ハ紙の垂を著く二本又は一本適宜に用ふ)

時花(花瓶一對に挿すべし但し一瓶にても妨げなし色數は隨意にす)

玉串(榊の小枝に紙の垂を著く數は拜禮する人の員に從ふ)

右は供物の品を擧ぐる迄なり其臺數は祭の輕重により適宜に増減すべし又品物も分限よ應とて如何樣にも好みに任すべし

祭式

一祭主始祭員一同(祭員は祓主兼手長一人後取兼手長一人調饌師兼裝束師一人但し人員は尙式の輕重によりて増減あるべし)靈舍の前に着座各一揖

一戸主始家族親戚一同着座

一祓式豫て靈舍の側に祓案大麻(又ハ塩水に榊の小枝を添へて置くも宜し)を裝束し祓主祓詞案を懷中して祓案の前に進み一揖一拜して祓詞を讀む(此間祭員家族親戚各拜伏す)讀み畢

りて祓詞案を本の如く懷中し二拜して手四つ拍ち復一拜して本座よ復す

一祓師祓案の前に進み一拜して大麻を採りて靈床を祓ひ次に供物を清められより祭主祭員を祓ひ次に戸主以下一同を祓ひ畢りて大麻を本に復し一拜して復座す

一調饌師進みて大麻と共に祓案を撤す

一祭主靈舍の前に進み一揖二拜して靈舍の扉を開き二拜して復座す(此間一統拜伏す)

但し簾なれば捲き帳なれば褰ぐ

一祭員各饌道に進み一拜して前に記す所の供物を手次ぎにて供ふ供へ畢て一拜して復座す

一祭主靈前に進みて一揖す後取祝詞案を手次ぎ祭主受けて持ちながら二拜して祝詞を讀む(此間一統拜伏す)讀み畢りて二拜して祝詞案を後取に渡し手を四つ拍ち一拜して復座す

一祭員一同居ながら一拜し手を二つ拍ち復一拜して冥福諄辭を連唱す唱へ畢りて二拜して手を二つ拍ち一拜す

一調饌師玉串案を裝束す

一戸主以下親族順次玉串を供へて拜禮

一祭主玉串を供へて拜禮

一祭員一同拜禮

一祭員各饌道に進み一拜して供物を撤す撤し畢て一拜して復座す
一祭主靈前に進み一揖二拜して靈舍の扉を閉ぢ二拜し一揖して復座す
一退手を拍ち一拜して各退去す

右は一祭事の概畧なり上に出す処の鎮座式以下春秋祖靈祭に至る迄皆此順序を以て時に當て増減取捨すべき事なり

○靈版書式

一代々の主人
苗字名大人（或い命、比古、翁、主、君、また靈神とも書く）靈位　裏年号月日歿享年何十何歳
一主人妻
苗字名妻某氏（里方の苗字）某子刀自（或い命、比賣、嫗とも）靈位　裏右に同じ
又　某氏何子刀自靈位　裏に何之誰妻年号月日歿享年何十何歳
一戸主とならざる男子
苗字名主（或い比古、君、郎子とも）靈位　裏何之誰幾男年号月日歿享年何十何歳
一夫なき女子
某氏某子（或は比賣、郎女、某女とも）靈位　裏何之誰幾女年号月日歿享年何十何歳

一幼稚の男女
某郎子靈。某若子靈。某童男靈　裏上に準ず
某郎女靈。某少女靈。某童女靈

一銘旗墓標墓碑の書式

右に倣ひて適宜に書すべし

○斂具（以下に記す諸具貧者い棺を靈主とを造り其他はすべて有に任すべし）

棺（臥棺を本儀とす然れども今は坐棺を用うべし松披杉梓等の材を以て方棺の製法あれども中等以下の人にてい畧して大甕又い桶等を用ゐるをよしとす）
柩（白木綿を風呂敷の如く縫ひ合せ棺の上に覆ふなり）
忌湯桶（尸を拭く湯を入るゝ桶なり）
拭巾（尸を拭く巾なり白木綿にて宜し）
衣服（白木綿にて作る春冬は袷にし夏秋は單にす又存生の時用ゐし衣服を用るも親族の意に任すべし）
覆衣（白木綿尋常の襦半なり）
褌（幅長さ常の如し小晒を用う）
帶（白木綿長さ六七尺一幅を四ッにたゝむ）

足袋
忌布（死者の顔を覆ふ布なり白木綿にてもよろし）
褥（白木綿にて製る）
嚢（同上生前手馴の品物を入る）
充嚢（棺内を塡むる料なり粉茶鹽麥殻の類を白紙又は木綿の袋に入る事初めにも云ひたるがごとし）
禮服（庶人男は羽織袴女は白衣たるべし神官紋賦は直垂狩衣を用ゐ官員は相當の禮服を用うべしされど死者を棺に歛めて其傍に置き添ふるなり又直ちに着するも親族の心に任す）

○葬具

輦（棺を載せて舁く具なり俗に輦臺と云圖を見合すべし）
注連繩（輦臺に掛る注連繩なり）
凳子（葬場にて棺を据へる臺なり略して輿を用ふれば輦凳子は造らず）
高張（白張たるべし大小數は分に應じて適宜たるべし）
幕（二本常の竹幕にて宜し）
紅白旗（絹にて造る布も惡しからず紐を著く旗竿青竹を以て造る）

銘旗（白布を用う絹も惡しからず上の端に紐を著く旗竿青竹を用う）
榊（大小及び數は身分に應じて適宜たるべし紅白の絹又は紙にて垂を著くべし）
生花（草木ともに用う）
供物櫃（白布の紐を著け注連繩を掛べし）
杖草履（白布又は白紙の袋に入る）
墓標（圖を見るべし）
机（饌を供する用具なり）
供物（上の祭典式通則に記せる品目を見合せ分に應じて適宜に調ふべし）
笹付竹注連繩（葬祭所墓所等の四方に建て曳いたすなり）
玉串（榊の小枝を白紙を切て著たるを云喪主以下各棺前に供ふる料なり）
手桶並柄杓

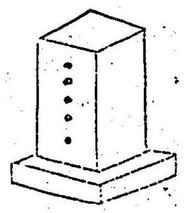
○祭具

靈主（圖を見合すべし）
靈屋（仝上）
高案二脚（一は靈主を戴する料　二は供物獻備料）

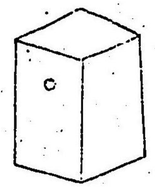
玉串案一脚（小机を用うべし）
三方（或は高杯折敷）
土器
瓶子（一對）
花瓶（一對或は一箇）
燈盞（二基或は一基畫は用ゐず）
榊（紙を八垂か四垂に切り違へて著るを垂といふ）
玉串（主人以下各供ふるなり）
供物（上の祭典式通則に委しく記すがとし見合すべし）
荻薦

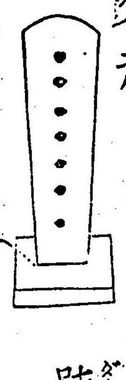
○圖式

靈主（メマシロ）　檜白木寸法適宜此二圖いづれよても主人の好に任すべし

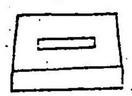


櫝（ヒツギ）



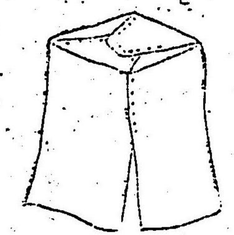


同笏形（シャクノカタ）



跌（ダイ）

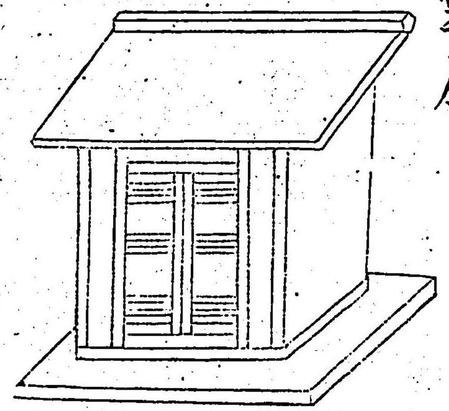
ぬさぶくろ　土器也



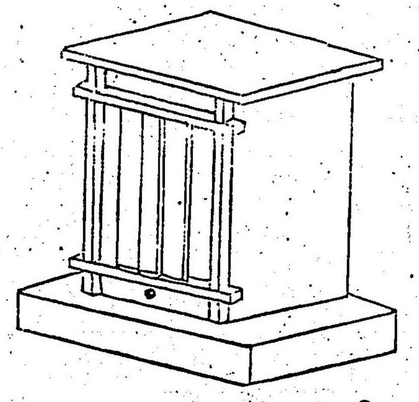
帕（クツホヒ）

靈屋へ納むるには此跌を除くべし正辰祭式年祭等の時は之を靈屋の前に出し跌に建て祭祀をなすべし

靈屋



同一製

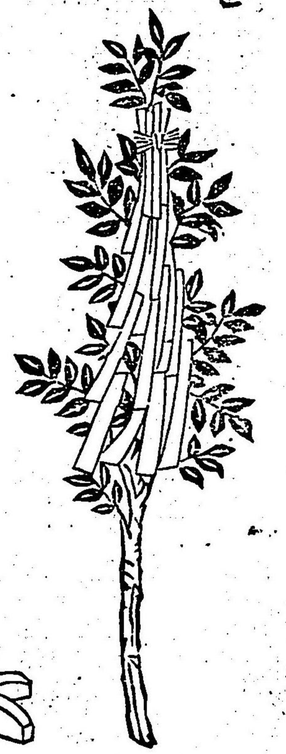


●此所を引出箱とし靈簿及び家系等を納むる料とするも便なり

材に檜を以てするを最上とす又杉にてもするも妨げなし寸法適宜たるべし

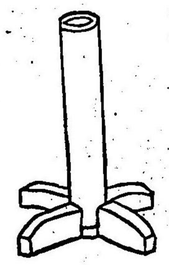
此両圖によりいづれにても主人の好に任すべし

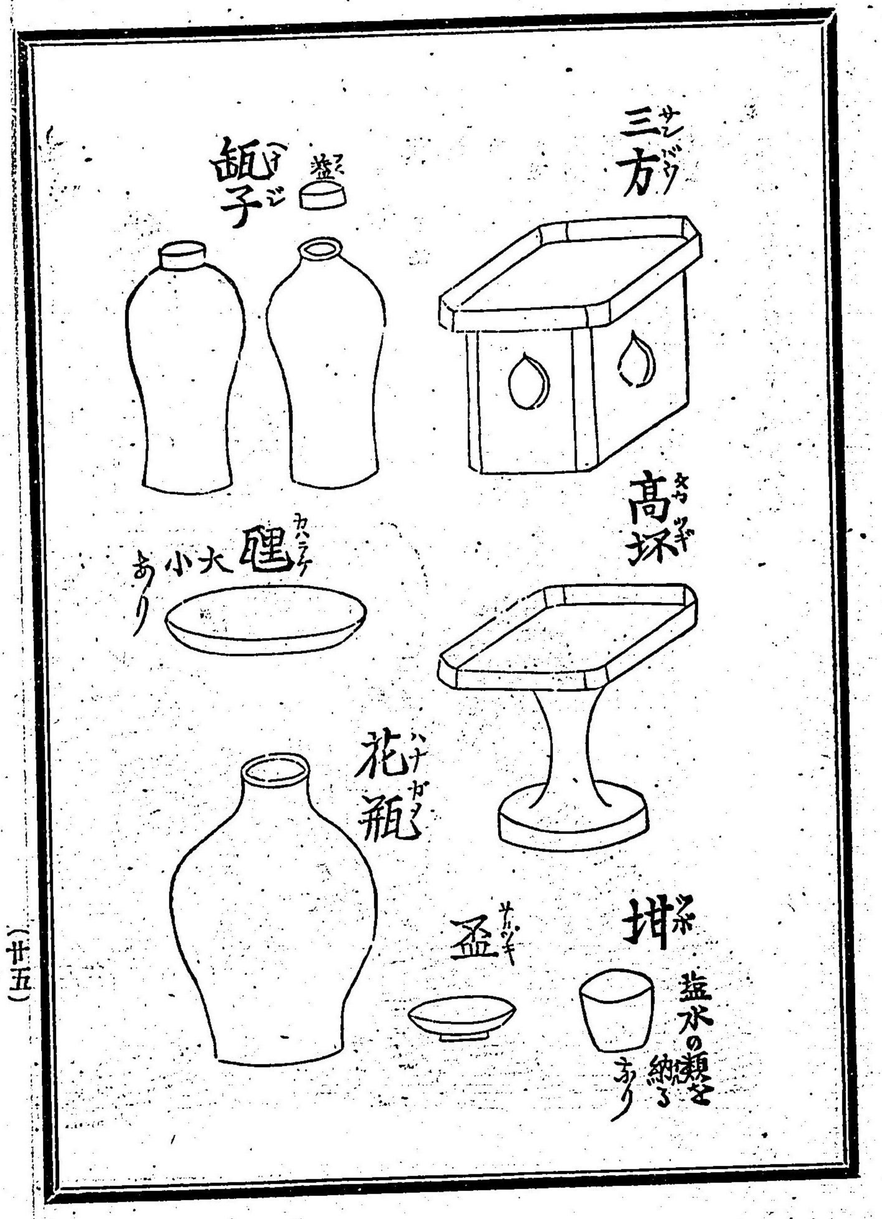
榊に垂を着けたる圖

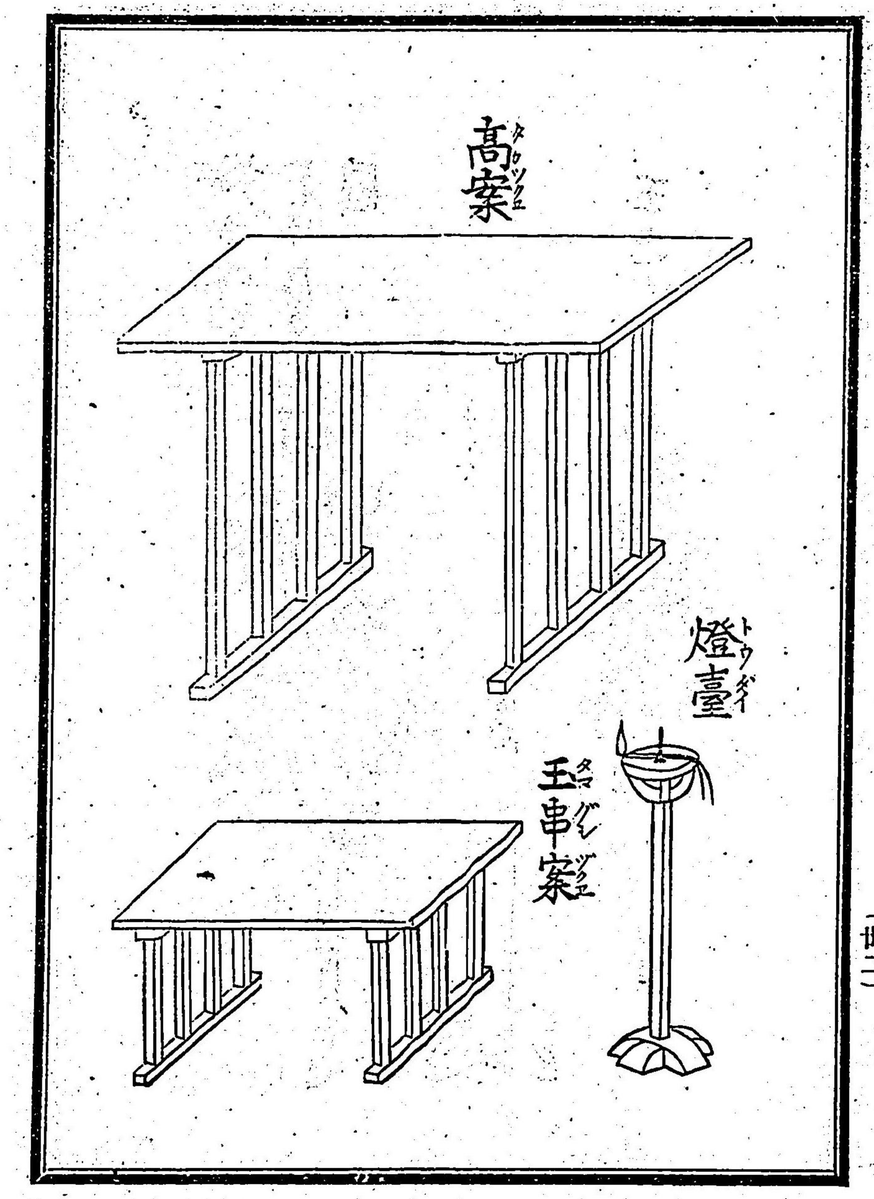


玉串

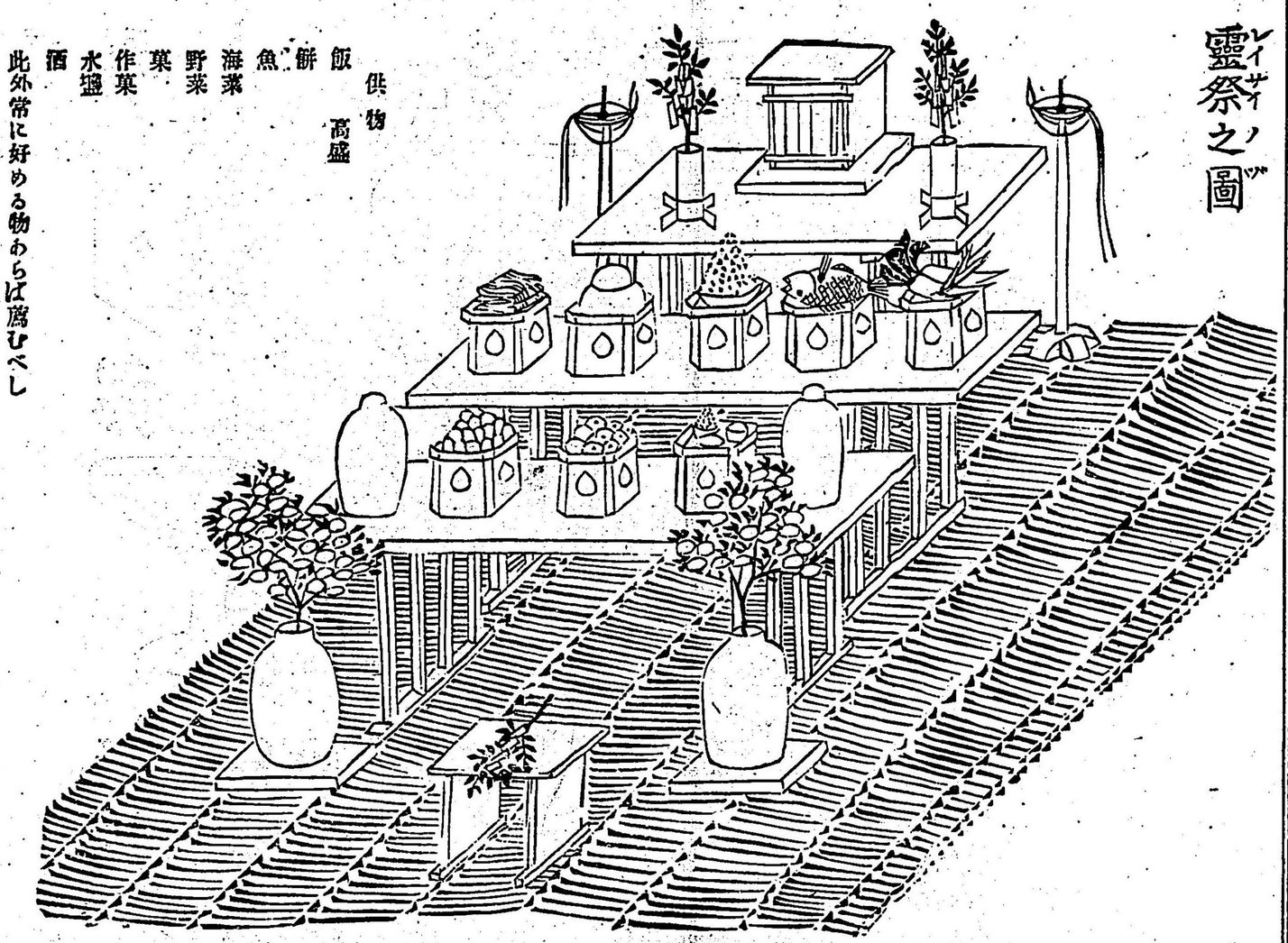
筒




甑子
三方
高坏
大小あり
碪
花瓶
盃
坩
塩水の類を納る
あり


高案
燈臺
玉串案

レイザイノズ 靈祭之圖



供物
飯　高盛
餅
魚
海菜
野菜
菓
作菓
水鹽
酒

此外常に好める物あらば薦むべし

同畧式

坐棺

材ハ桧松油杉等ヲ用ウ

板ノ厚サ二寸ヨリ一寸五分

高サ二尺四寸ヨリ三尺六寸迄

四方チキリサシ

四方廣一尺八寸ヨリ二尺五寸マデ

ヒキオロシ

入棺畢たらば棺の上に白布い帀こ掛くべし

桶

瓦棺

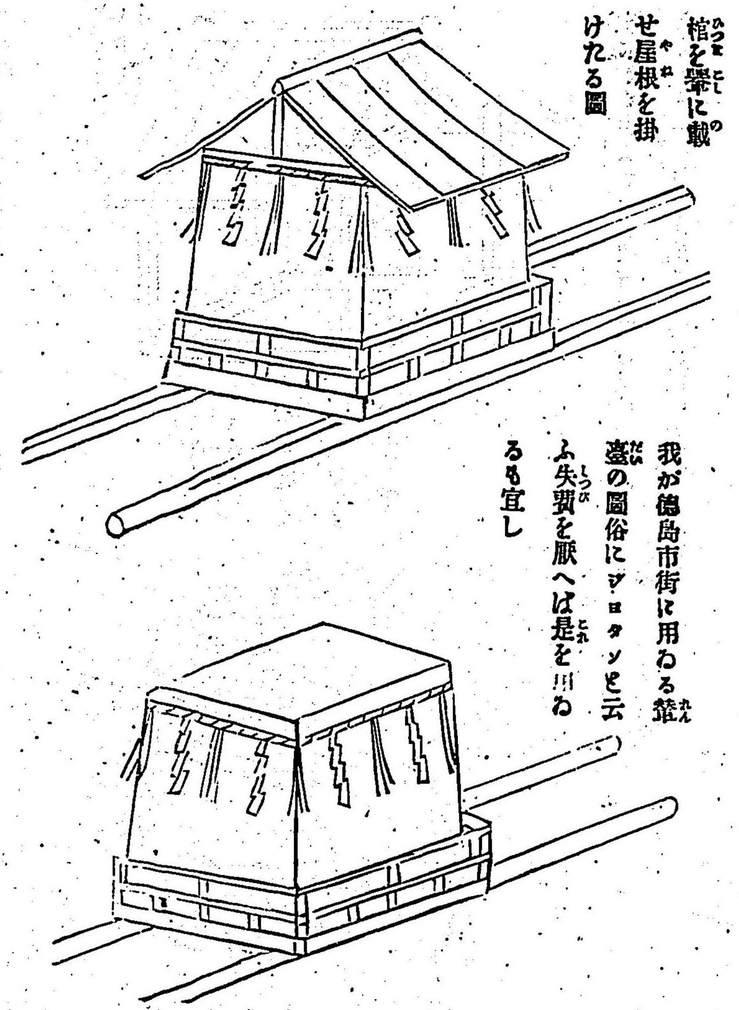
棺屋

輦

棺を載せて舁く具なり俗に輦輿と云ふ

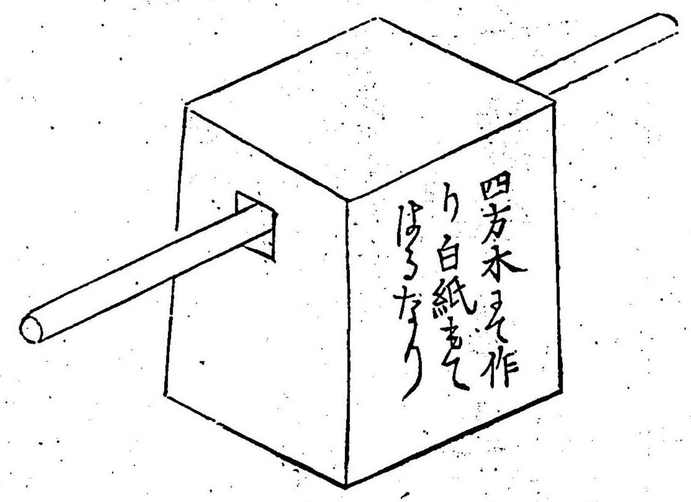
壁木もて屋根を造り四方を白布又は白紙にてはるなり上に千木を付け或は屋根を紙にて造るも宜し

凳子



棺を擧に載せ屋根を掛けたる圖

我が德島市街に用ゐる輦臺の圖俗にヂロタツと云ふ失費を厭へば是を用ゐるも宜し



至極省略すれば臺を造らで只甕或ハ桶の上に圖の如き帆を掛くるか輿に載するも可なり

小旗

竿

銘旗

白絹又ハ布を用ふ

紅白の絹を用ふ下等ハ布薄力者ハ紙にてもよし

苗字名之柩

竿

高張

帚

白杖

杖嚢

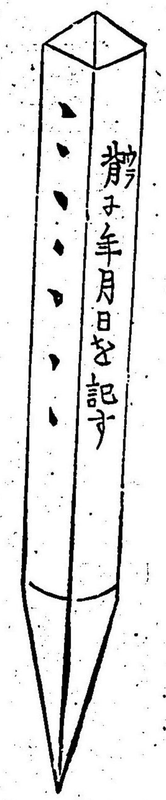
提燈

材ハ杉或ハ竹

白木綿又ハ紙を作る

大榊（オホサカキ）

墓標（ハカジルシ）

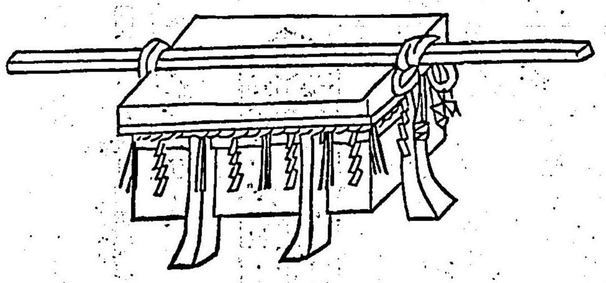


背ニ年月日を記す

槍或ハ杉ノ法凡三寸角より五寸角迄長さ土中ニ入る分を除け三尺より三尺五寸位迄或ハ幅四寸厚さ二寸許より也作る

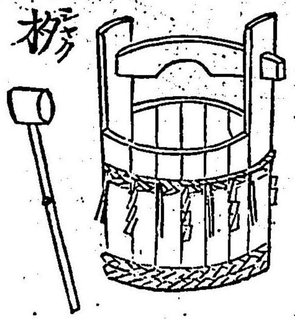
辛櫃（カラヒツ）

供物を入るくあり

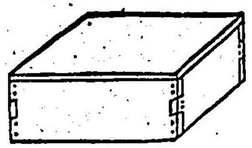


手桶（テオケ）

杓（ヒシャク）



薄力者は辛櫃を止め供物箱を作り酒洗米水塩を入るべし



供物箱（クモツバコ）

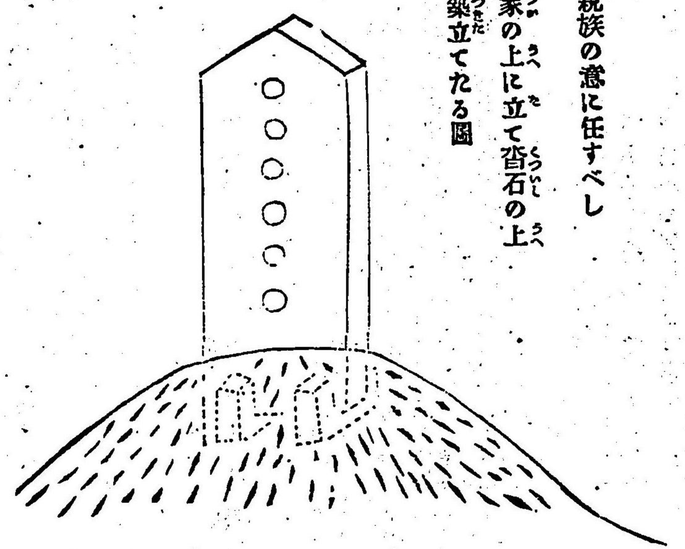
奥津城之圖

四方に柵を設け門燈籠等を建るも好みに任すべし

同一製

大小ハ親族の意に任すべし

碑石に沓石を着かせ冢の上に立て沓石の上まで土を厚く盛りて築立てたる圖



一家より喪あらば事に慣れたる人をして諸般の喪具を造しめ又簿記を作りて弔客の姓名親賓の賻物會葬の姓名皂隷力者の員數を記し富家は一人を点めて財貨の出納及び諸物價に至るまで細記しろの亡者の姓名本貫父母行年誕日葬行等もを詳に載せて後掛に備ふべし

一親戚朋友に喪あらば速く行弔ひて諸事を營辦け喪家もし貧からば財力を補添て喪儀を全からしひべし

一是迄佛祭の者神葬祭に改めんとする時ハ先檀那寺へ照會濟の上産土神社の神官又ハ教導職の者へ頼み祭儀を行ふべし

一是迄の佛檀を革ため佛像を取り除けなば（佛ハ寺院に送るべし）先祖以來の位牌院號居士號大姉號信士信女も悉く戒名とて（戒名とは佛の弟子に成たる驗の名と云意なり）佛號なれバ廢して圓式の如く新たに靈璽を作り神官又は教導職に出張を乞ひ經魂式を行ひ鎮祭すべし

一靈璽の書式は前に記すが如し代々の祖等ハ夫婦合牌にするも妨げなし然かる時ハ左の式に從ふべし

苗字名大人 何氏何子刀自　靈

大人　何年何月何日歿享年…… 刀自　何年何月何日歿享年……

先室　何氏何子刀自 苗字名大人　靈 後室　何氏何子刀自

何、、、、、 （名の頭字なし）何年何月何日歿享年… 何、、、、、

一靈璽（世俗の過去帳と云ふもの）に誌したるハは婦人ハして通稱の知れざる者も多し其時は止む事を得ず戒名の内二字取て漢語諡となし左の如く認むべし

□□某氏（里方の苗字）婦人　靈位（通禮ハ婦人又室人と書し位階有人は孺人又安人と書すべし）

某氏□□婦人　靈位　□□婦人某氏　靈位

又單ハ某氏大室人とか某氏大刀自とか書するも好し

一夫無き女子にして通稱の知れざる者は戒名の内二字取りて

□□嫂子某氏靈位　□□嫂某氏靈位

拾四歳以下ならば

□□小嫂子某氏靈位　□□小嫂某氏靈位

なを書すべし畢竟後世に垂るゝ璽なれば其人の紛れなき樣に書くを要す

一靈主ハ父母祖父母曾祖父母高祖父母（以上四等親と云ふ）と是を別に作り高祖より以上は幾代ありとも畧して一基と成すも時宜によりてハ妨げ無かるべし其時は五世以上を先祖代々の靈牌

として家廟の中央に安置し（則　某氏歴世神霊などゝ書すべし）高祖より以下四等親と先祖と五座（但し四等親の夫婦の霊牌を各一座とすれば八座先祖と九座也如此爲も好みに任す）を祭るべし（子孫一代毎に高祖を繰上せて先祖とするなり）兄弟姉妹叔姪舅姑の類は別に霊主を造らず霊簿に苗字名年月日享年等委しく記し置き其霊簿を祭るべし扨假令佛號なりとも取除けし位牌を毀ち棄む由なければ筥などに入れ墓所に埋むべし

折中喪儀略附錄

○招魂の詞

□乃霊乃前爾白左久汝命也惜志久身退里坐志奴留愛介久此世乎去坐志奴留姓名親族等乃請志乃任爾齋主止志斐儀仕奉瓦久所聞食世白須如此所聞食波志天汝霊魂乎此乃家内爾祭奉里鎮奉止爲天此乃霊主爾遷奉瓦万志止其行事仕奉瓦久平介久所聞食天荒魂和魂分知給比天移里給比留里給倍止白須

○招魂して霊祭をなす左の詞を告るべし

□乃霊乃前爾職姓名告白左久汝命也思保存外爾悔志久此顯世乎離天百不足八十乃隈道に進介幽冥爾罷坐奴禮親族等波言牟須倍爲牟須倍不知爾歎支悲美給倍杼如何爾爲牟生死波人乃力爾任世得奴事爾有禮婆世米天御葬乃禮爾太美多久治奉牟止爲天霊主爾霊魂招奉里久遠永久齋比奉瓦牟相宇豆那比給比此家内爾霊魂乎留坐天平介久鎮坐世白須

□印は亡者の姓名諱號なり

○殯棺の前櫃に饌物を奠へ左の詞を告るべし

冒乃久悲志支□乃櫃乃前爾告白左久汝命也御身勞志給布依天親族等波皆久休息布事無久千々爾心乎毛

尽志給比醫師等爾言議里天種々治療志加杵其驗無久忽爾此世乎離天八十乃隈道止遙介幽冥爾罷坐奴禮婆

親族等波世爾云志真受心棲歎支悲美給閉杵現世乃慣止空志支御禮乎如斯奈賀坐世奉留倍不在婆皇大

御國乃御掟乃隨爾神葬々奉真牟種々乃葬具設備天「今日乃夕日乃降爾野邊爾送奉留人等諸行手

乃道毋狭爾立並比天御送仕奉留狀乎平介安久聞取坐天罷坐牟道乃間波恙美無久後毋輕久出立坐世止

白須

○罷魂式出棺式を合て一緒に行ふ時は右今日乃夕日乃降爾云々を左の如く改めて告べし

云々今日乃夕日乃降爾野邊爾送奉真牟爲留先達天汝命乃靈魂乎此家内爾齋比奉里鎮米奉真牟靈主

遣備天靈魂招奉真久平介聞食志和魂幸魂乎憑給比罷給比然志天奇魂波幽冥爾參上給比荒魂波遺體

爾副天奥都城所爾到里坐世止御酒御饌種々乃物乎供奉里各毛各毛玉串乎持捧天拜美奉留狀乎阿波禮

止聞食志宇豆奈比給比天罷坐牟道乃間波恙美無久後毛輕久出立坐世止白須

○遺體を火葬になし置き遺骨を埋葬する時に葬祭の式を行ふ時は左の詞を加ふべし

云々空體乎乍如斯可奉坐不在波哭女乃哭都々毛野邊乃烟止成志奉里天遺骨乎奥都城所爾理葬奉止今

日乃夕日乃降爾神葬乃禮事治奉留形乎平介聞取給比罷坐牟道乃間波不滯後毛輕久出立坐世止白須

○葬祭式場に柩を据ゑ饌物を奠へて後左の詞を告るべし

是乃齋場乃四方四隅爾齋竹樹天注連繩打廻真其中央爾暫昇居坐奉留□乃柩乃前爾職姓名儀葬取

總持天白妙乃衣乃袖毛曾保濕流加哀美偲毘都白久左汝命也加久現世乎離里天八十乃隈路止遙介幽冥

爾罷坐奴留事與安那悲支母安那愛伎加親族等波言牟須倍爲牟須倍不知爾歎支悲美給閉杵現世乃慣

止默毛敢在禰婆相佐和爾喪具設整閉行隨乃列波箒以天道乃長手乎掃清米白杖乎御前爾持白旗赤旗乃

小旗乎此方此方爾立並倍五百枝眞賢木爾木綿取垂種々乃生花乎左右爾持並倍又高張以天道邊乎照志親族乃人等其他會葬人柩乃後先間毛無久立列並天恙事無久滯事無久送奉留任爾此齋場爾參來天御骸爾別禮奉良牟爲留悲志左彌增利悔志左伊登杼添里天哭泣都々奈事爾在禮心毛鬱悒乃限支事志婆毛久手足毋樓邉奈賀御酒御饌爾堅鹽毋比乎備奉天各毛各毛八十玉串乎持捧祁重々爾永訣乎告白須狀乎聞受坐天汝命乃形見乃所止親族參拜牟倍奥都城乃下津岩根乎千代乃住處止無窮爾安穩爾鎮坐世白須

○火葬にする時の終の詞を左の如く改べし

云々永訣乎告白須狀乎阿波禮止聞食世然志天事竟侍良爾御骸乎婆直爾御骸乎婆野邊乃烟止成奉里遺骨乎永世乃欽慕爾爲牟形見乃奥都城所爾藏志理米奉良牟仕奉留事乃由乎聞食志其處乎千代乃住箇止安久穩爾鎮坐世白須止白須

○埋葬訖りて左の詞を告るべし

云布毛悲之久思布悔之□也其靈魂乎婆家內爾齋比鎭米置天今如斯遣體乎藏米奴留柩乎奥津城乃奥深久埋米奉奴故自今以後汝命乃千代乃住處止親族參里拜美仕奉良牟事乎聞食天石垣乃動無久安介久鎭坐世止白須

（遺骨埋葬の時の此詞告るに及ばす）

○喪家に歸りて清祓し靈前に饌物を奠へ左の詞を告るべし

此乃靈床爾招奉里令坐奉留□乃靈乃前爾職姓名白左久汝命由久里無久現世乎離天幽冥爾面隱給閉婆親族等波將言須便將爲須倍不知爾憂比歎支都如斯奈賀日乎經月乎累奴倍有良禰惟神乃御掟乃任爾事竟里天神葬乃禮良既爾事竟奴是以天家乃內外毋清良加祓比浮天御靈乃前乎拜美齋比祀留止爲天御酒御饌種々乃物乎設備天御祭仕奉良久御心毋穩爾聞食宇豆那比給比天此家爾波諸乃災害無久幾万世毋變留事無久移布事無久子孫乃繼々春秋乃祭乎欽留事無久落留事無久令仕奉給閉止白須事乃由乎甘爾聞

食世止白須

○殁日より十日に至れば祓を修し酒饌を厚く奠へて左の詞を告るべし

此乃小床爾靈主安置天招奉里令坐奉留□乃靈前爾職姓名告白左久汝命伊思保延受此世乎退坐都留故爾親族等波萱草乃束乃間毛思忘禮受夜叢不知爾悔之惜之美歎支悲美都在間爾一日二日止日波來經行支一夜二夜止夜波隔里天今日波早十日止云日爾成奴禮波亦毛新斐爾遍布我如思比和備都々伊加泥其神魂乎慰奉瓦牟爲天備布幣帛波生茂禮留物止榊葉爾時花乎毛取添天二所爾挿立取食留物止御酒御饌海川乃魚甘菜辛菜乎始米種々乃物乎置足波志備奉里齋比奉留狀乎甘瓦聞食志天永支世乃家乃鎮米止鎮里坐天內外乃患毛無久諸里給比親族親毘賑天家門廣米止茂志八桑枝乃如久令立榮春秋乃祭祝乎毛絶留事無久解留事無久仕奉瓦志給閉止白須事乃由乎聞食世止白須女

○廿日三十日四十日の靈祭にも饌物を奠へて左の詞を告るべし

阿波禮□乃神魂也身退坐都留悲美歎止甲斐無久悔毛由止効無久現身古曾波爲牟須便無久神葬埋米奴神魂波他所爾放左自靈主造奉里屋內乃幸魂奇魂止齋比鎮米奉天日爾異爾怠瓦受緩乃受御祭仕奉留間爾新々止來經行久日並波暫毛不淀今日波早幾日乃祭日止成奴禮式乃隨爾御靈乃前乎齋比拜美奉留止志天親族等寄集比種々乃饌物乎設備天御祭仕奉瓦須事乃由乎職姓名齋主止爲天玉串乃中執持天稱冒竟奉久平介安久聞食宇豆奈比給比如斯治奉留禮式乃漏落牟條々乎婆見直志聞直志給比親族等我赤心乎平介久聞食給閉止白須

乃眞情爾仕奉瓦事乎嬉之止歎保之止毛聞食受給閉止白須

○五十日に至り靈主を祖先の靈屋に合祭す其時先靈屋を拜して左の詞を告るべし

此乃靈屋爾鎮坐須遠祖代々乃祖等乃神靈乃御前爾職姓名敬天白左久神齋□身罷坐之與早久毛五十日止云日爾式奴禮留故靈主乎此靈屋爾合世奉瓦牟爲留狀乎諸共爾相宇豆那比坐世止白須

○次に本主の靈主を拜して左の詞を告るべし

□乃神魂乃前爾白左久汝命身罷坐之與早久毛五十日止云日爾遠祖代々乃祖等乃鎮坐須靈屋爾合世齋比奉良牟爲留狀乎祖宇豆那比坐天永爾遷里鎮坐世止白須

○次に靈主を祖先の靈屋に移して饌物を奠へ左の詞を告るべし

□乃神靈乃前爾職姓名告白左久汝命身罷坐之余來經行月日乃多由多布間無久早毛五十日止云日爾那成奴留故今日乃朝日乃豐榮登爾「夕日乃降爾」遠祖乎始天代々乃祖等乃神靈止同御舍爾合世奉里合坐奉良久相宇豆那比坐天禮代乃御饗止進留御酒御饌種々乃物乎平介安介聞食之天遠祖代々乃祖等乃神靈止御心乎一給比御力乎協世給比家長乎始屋內乃者等異心無久惡行無久己我乖々爲受親子乃睦厚久妻子乃親深久同心爾恪美勤米祖名落左受氏名汚左受子孫乃八十連家門高久廣良爾伊加斯夜具波延乃如久令立榮給比毎年乃御祭絕事無久怠事無久令仕奉夜乃守日乃守爾守幸幣給閉止白須

辭別天遠祖代々乃祖等乃神靈乃前爾白左今日乃此日爾□乃神靈乎此乃御舍爾合世奉良久相宇豆那比坐天奠留饌物乎平介安介久相嘗爾聞食止白須

○百日の期に至らば家廟にて靈祭を行ひ左の詞を告るべし

此乃靈屋爾齋奉里合坐奉留□乃神靈乃前爾職姓名告白左久汝命身罷坐之與來經行月日乃多由太布間無久早久毛百日止云日爾那成奴留故常毛忌留々間無久歎加比慕比給閉留親族等乃事執持天神靈乃慰万留倍久祭祀治奉牟止爲天進留禮代波生茂禮留物止榊葉爾時花乎取添天二所爾挿立取食留世物止御酒御饌魚菜種々乃物乎置足波之備奉里齋比奉留狀乎平加甘良爾聞食之天彌遠永爾代々乃祖等止御心乎一毘御力乎合世給比家門乃遠支世乃守家乃鎮止坐須御德乎現之給比此家門波並立留松乃一木毛不落連奈枝爾至迄嚴樫我枝乃春乃葉乃繁榮由事乃如久彌榮爾合榮給比親族和毘睦毘浦安久輔樂之久令在給閉止白須

辭別天遠祖代々乃祖等乃神靈爾白左今日乃此日爾□乃百日乃祭祀仕奉留止爲天進留饌物乎相嘗爾聞食止白須

○一周祭の期に至らゞ靈主を家廟より家内の清き所に移して祓を修し饌物を奠へ左の詞を告るべし

此乃奥床爾齋奉里令坐奉留□乃神靈乃前爾職姓名告白左久阿波禮汝命也此現世乎身罷坐都留昨年乃此月乃今日止早久一年周祭御祭乃日毛一日爾那成奴留故常毛忘留々間無久歎加比嘉比給閇留親族等我心爾波伊登杼懇之偲留物加乃伊加泥其神靈乎慰米奉止牟爲天進留禮代波云々（以下百日祭の詞と同じ）

○三年祭以下ハ左の如く白すべし

此乃齋床爾齋奉里令坐奉留□乃神靈乃前爾職姓名告白左久汝命伊去之何年何月何日爾現世乎去坐天今波幽冥乃神列爾鎮坐須故爾此家乃守神止常毛尊毘敬比仕奉留今日波三年乃御祭仕奉留倍日爾廻來奴禮親族諸人乎集閇天神靈加慰米奉牟爲天奉留禮代波云々（以下百日祭の詞に同じ）

○春秋の靈祭はまづ祓を修し饌物を奠へ左の詞を白すべし

此家乃遠祖代々乃祖神等親族乃神靈等乃前爾慎敬天白左久汝命等乃事始給比次乃隨爾代々次

々乃讓乎受天今日乃生日乃足日乃傳佩留事無久寒留事無久倭文機乃糸心裏安久住居來留事乃高久尊支恩賴乎重美尊美忝美御惠乃千々乃一毛報奉良万欲之天毎年乃例止今日乎吉日乃吉時止擇毘定天親族諸寄集比八取乃机爾置足波之奉留禮代波忌清米多御酒御食乎始米種々乃多米都物乎横山那備奉里奥山乃榊我枝爾時花乎取添天奉留狀乎平介安介聞食之天祖々乃讓里給布家督乎負畏美家須門荒之穢須事無久彌高爾仕奉里弥繼爾將繼止思比愼天淸支明支心以天彌務爾務米彌結爾結里都子波祖乃心成伊子爾波在倍志心爾掛天仕奉利日毎爾願申須事共乎免之給比授祢給比福乎令蒙給比身波健爾命波幸久令在給比天今毛往前毛遠永久守惠美給閇職姓名今日乃齋主止爲天親族等乃中執持天稱辭竟奉良久白須

○靈祭の時祭官一同左の詞を連唱すべし

掛卷毛綾爾恐支久方乃天之御中主大神薦枕高皇産靈大神　靈　幸神皇産靈大神三柱乃皇神等乃大前

手遊爾慎敬比畏美畏美毛左白久皇神等乃依賜閉留靈魂波暫現身爾宿憑天波其現身乎志人止在留倍支道乎
行波之世乃爲國乃爲爾其功乎立其業乎成左之限無支造化乃神業乎助介奉志然後爾波遂爾復命申須倍
米米然後爾波有杼其靈魂與利發留心爾依天身乃行爾善惡品
久神量々賜閉事爾之其靈魂波吹風乃目爾古見衣耳爾古聞衣常志邊消留事無久失留事無久神止坐
留事爾天曾聞耳爾天曾有祁然波有杼其靈魂與利發留心爾依天身乃行爾善惡品
天世乎毛扶介國乎毛守里子孫乎惠幸布倍定支爾祁留有祁然波有杼其靈魂與利發留心爾依天身乃行爾善惡品
〜有禮婆幽冥爾復禮留後乃神位毛高支低支差異波有奈恐古皇神等伊今日奈招祭留靈神我若過犯
祁つみと申あらば其罪止云罪咎止云咎波神直日大直日爾見直志聞直志賜比天高支奇支神乃列爾入瓦之賜比
牟罪咎有婆
春乃旦秋乃夕爾波端山乃花乎覩深山乃紅葉乎詠米天阿奈於母志呂止心毛安久轉樂ク爾遠永爾幽世乃冥
福乎授祁賜閉恐美恐美遊爾乞祈奉留事乎平祁久安久聞食止白須

○改式を行ひひとせば新に靈主を造りて佛祭の位牌と一緒に高案の上に置き祝を修し供物を奠へて左の詞を白すべし訖て佛祭の位牌い他へ取除くべし

此乃齋床爾齋奉里令坐奉留某乃家乃遠祖代々乃祖等親族乃靈神等乃前爾職姓名慎敬天白久玉

手次掛天白須甚畏加禮食國知食須天皇我朝廷乃大支御政毛時々代々乃狀爾隨比遷里變留隨爾天下
乃公民衆庶乃家乃祖靈祭余葬儀治米行布爾三栗乃中世余或波佛乃教乃手風爾慣比或波赤縣乃國
乃制爾據里天大八洲國乃眞柱本乃心波漸々爾沸久乏久成來天在之時至里天万機乎改米正之給布厳
大御代止成天御世御世乃天皇命達乃大御靈乎惟神乃御掟以天治奉給比齋比奉給閉留事乃甚嬉之久歡
之如斯在大御手風乃隨爾裔孫某伊千早振神習布眞心乎振起天汝神靈等乃祭祀乎我大御國風乃神祭
止爲志清久清々之久齋比奉久汝神靈等毛素余幽冥大神乃御治乎蒙里負那負那鎮坐都々在婆清久正支
利奉乎
式以天齋比奉留乎嬉之止悅之止思保須良故今新爾造奉禮靈主爾各々其神靈乎移之給比留米給比自
今以後只管爾幽冥大神乃廣支厚支御惠乃蔭爾隱呂比浦安久樂之久坐天子孫乃八十連長支世爾此家乃守
神止鎮坐天時々乃祭祀乃禮乎絶留事無久懈留事無久仕奉牟事乎相諸比給止閉禮代乃御酒御食魚菜種
〜乃物乎横山奈備閉奉里稱辭竟奉久乎介安久聞食止白須
天

○毎朝神拜の後靈前に向ひ左の詞を稱へて拜禮すべし但正朔の二詞各心に任す

遠御祖歴世乃御祖等親族乃神靈等乃御前乎拜美奉天白左久汝命等乃事始天授祁給閇留御功乃陰隠比今毛往前毛平介久安介久有經留事乎嬉美謝毘稱言竟奉久御心毛宇良宜聞食天日爾異爾恪美勤留家業乎彌弖爾弖米給比親族朋友他諸人乎毛睦毘集閉天惠良惠良爾笑比賑布家止令在給比子孫乃彌次々家門高久廣久令立榮給閇止謹美敬比天白須

○同じく暑詞

遠御祖代々乃御祖等親族乃神靈等今日乃御禮乎白志奉良久白須止

○朝廷御祝祭日には供物を奠へ左の詞を白して拜禮すべし

遠御祖代々乃御祖等親族乃神靈等乃御前爾恐美恐美左白今日波掛卷毛畏支天皇朝廷乃大御祭日止天下乃諸人高支卑支共爾樂美嬉美御祝乃壽詞仕奉留日爾在里故御靈等乃御前爾毛御酒御饌備奉里

祭祀乃禮仕奉留狀乎平介久安介聞食天惡美給比幸弊給止恐美恐美母白須

○毎年正辰には家廟よて靈祭を行ひ左の詞を稱へて拜禮すべし

我父命乃神靈乃御前爾白左今日波汝命乃身殁坐志其月乃其日爾奈在祁故雜々乃饌物乎作備天靈祭仕奉留狀乎平祁久安祁久聞食天慕備奉留真心乎阿波禮止聞食受給閇恐美恐美白須○父母兄弟伯叔父母をば名を呼ばすして吾何ノ命と稱ふべし兄弟ならば吾兄命吾弟命といひ妻には汝妹命といひ子にハ吾子某と其名を稱すべし

辭別天遠御祖代々乃御祖等乃神靈乃御前爾白左今日波父命乃身殁坐志期止靈祭仕奉留依天献留饌物乎相嘗爾聞食天諸共爾相宇豆那比坐止恐美恐美毛白須

○墓參の時ハ左の詞を稱へて拜ひべし

吾父命乃千世乃住家止鎮坐須奥都城乃御前爾慎美敬天白左久此所波志遺骸乎埋米奉禮留所志在禮常毛荒左自損波自殿支石牌乎築立天齋奉里時々參詣來天清久明久掃清米榊葉及時花乎刺立天拜奉留止

爲禮杼年月乃久志間爾由久理無久過　息　天不飽思保須事乃牟爾文厚支御心爾見直志聞直志
毛　支毛　久毛　天

給比惠美給比幸給閑恐美恐美毛白須
天

○服忌摘要

一父母　　忌五十日　　服十三月

父他より養子ゝ來り候節ゝ父に於て養方の忌服定式（五十日十三月）を受るに付其子に於ても父の養方は定式の忌服を受け父の實方ゝ祖父母伯叔父姑半減の事

一養父母　　忌五十日　　服十三月

家督相續或ゝ分地配當の養子ゝ實父母の如く同姓にても異姓にても養方の親族は總て定式の忌服を受け實方の親族に於ては父母は定式の忌服受之祖父母伯叔父姑兄弟姉妹ゝ半減の忌服を受け其他の親族は忌服無之○家督相續或は分地配當せざる養子は仝姓よても異姓にても養父母は定式忌三十日服百五十日也養方の兄弟姉妹ゝ相互に半減其他の親族は忌服無之實方の親族ゝ定式の通相互は忌服可受之

一嫡母　　忌十日　　三十日

嫡母とは妾腹の子より父の正妻を指すの稱呼なり○嫡母對面せざる時ゝ忌服を受けず通路せし時は忌服を受くべし父死去の後他へ嫁し或ゝ父離別するゝ於ては忌服無之○嫡母の親族は忌服無之

一繼父母　　忌十日　　服三十日

父死後母へ後夫を迎ふる者之を繼父と稱し母の連子にして後夫に養ゝるゝ者（養子にあらず）又之を繼父と稱す○先妻の子父の後妻を呼て繼母と云ふ○父死後繼母他へ嫁し或ゝ父離別するに於ては忌服なし但繼父母の親族は忌服なし○父の後妻と通路せし時は對面なくとも繼母の忌服を受くべし○相續養子たる者實方の繼母忌服なし

一離別之母　忌五十日　服十三月
父の離別せし實母を離別の母と云ふ○離別の母他へ再嫁するも定式の忌服を受け其親族も亦定式の忌服を受く○養腹の子父其母妾に暇遣はし他へ嫁するも離別の母に准じ定式の忌服（五十日十三月）を受く但妾の親族は忌服無之

一夫　忌三十日　服十三月
一妻　忌二十日　服九十日
婚儀未整内にても結納取換へしたる時へ夫婦互に二十日遠慮すべし○聟養子にて養家の妻離別の時は忌服無之其他兄弟姉妹忌服常の如し○元來忌服の續ある者と縁組し（從父兄弟姉妹相互に婚姻する等を云）其離縁せし時は夫婦の縁切るゝにより忌服なし但婚儀未整内にて離縁せし時は元の續柄の忌服なるべし○妾は忌服なし

一嫡子　忌二十日　服九十日
相續を讓るべき者を嫡子と云ふ故に嫡長子にても其家の相續を讓らざる者へ末子の忌服を受く養子次三男にても相續人に相立ちたる時は嫡子の忌服（二十日九十日）を受く

一末子　忌十日　服三十日　女子　同上
末子相續人と定むる時へ嫡子の忌服を受け末子養子に遣すとも忌服差別なし○女子は最初に生るゝとも末子に准ず○人の養女に成るとも末子定式の忌服を受く

一養子　忌十日　服三十日
相續人と定むる時へ嫡子の忌服を受くへし○相續養子實方の親族へ父母を除くの外忌服半減○父も養子其身も養子なる時へ父の實方忌服無之

一養女　忌十日　服三十日
養育のみにて入聟も成さず相續人も立ざる時は養父母の忌服は三十日百五十日受之養方兄弟姉妹は互に半減其他へ忌服無之實方親族へ定式の忌服受之

一夫之父母　忌三十日　服百五十日
夫の父母とは舅姑を云ふ○總て女へ縁付くとも養女と云ふに非ざれば夫の親族忌服無之里方親族へ定式の忌服受之○夫養子なる時へ夫の實父母及親族總て忌服無之

一祖父母　父方　忌三十日　服百五十日
母方　忌二十日　服九十日
離別の祖母忌服差別無之○相續養子實方の祖父母は半減の忌服受之○相續せざる養子養方祖父母忌服なし實方祖父母は定式の忌服を受く○嫡孫承祖たる時は父母定式の忌服（五十日十三月）を受け其外の親族は實の忌服を受くべし曾孫玄孫たりとも亦同じ○祖母他へ嫁するも忌服差別なし

一曾祖父母　忌二十日　服九十日
母方には忌服無之一日遠慮○相續養子養方の曾祖父母へ定式の忌服受之實方曾祖父母相互に忌服なし○離別の曾祖父母忌服差別なし

一高祖父母　忌十日　服三十日
母方には忌服無之一日遠慮○相續養子實方の高祖父母へ互に忌服無之

一伯叔父姑　父方　忌二十日　服九十日
母方　忌十日　服三十日

相續養子養方の伯叔父姑ハ定式の忌服を受け實方ハ半減の忌服たるべし○父母種替の兄弟姉妹は半減の忌服可受之○父養子父の實方伯父は半減の忌服甥ハ忌服無之○養方の伯叔父姑他家へ養ハるゝ者は半減の忌服を受く實方の伯叔父姑他家へ養ハるゝ者も亦之に同じ○離別の母の姉妹なる伯叔母ハ通路を爲す爲さゝるに關せず定式の忌服受之

一兄弟姉妹　忌二十日　服九十日

相續養子養方の兄弟姉妹は定式の忌服を受け實方兄弟姉妹ハ相互ゝ半減の忌服受之○別腹たりとも忌服差別なし○養方の兄弟姉妹他家へ養はるゝ者は半減の忌服實方兄弟姉妹他家へ養はるゝ者も亦之に同し

一異父兄弟姉妹　忌十日　服三十日

一腹別種之を異父兄弟姉妹と云ふ○異父兄弟の內他の相續養子となる者ハ相互に半減の忌服(五日十五日)受之

一嫡孫　忌十日　服二十日

嫡孫は嫡長男(嗣子)の子なり○嫡孫承祖たる時ハ嫡子の忌服可受之祖父母死去の時も嫡孫の方へも五十日十三月の忌服可受之此外の親族忌服差別なし曾孫玄孫たりと云ふとも同例なり○嫡孫他子へ養子に遣す時は忌服無之孫の方よりは實祖父母半減の忌服受之

一末孫　忌三日　服七日　女孫　同上

女孫は最初に生れても末孫に准す○他家相續の孫は忌服無之孫よりハ實方祖父母半減の忌服を受ク○次三男他家の養子となり出生の子ハ祖父母に於て忌服無之の孫方にては祖父母半減の忌服を受ク

一曾孫玄孫　忌三日　服七日

娘方曾孫玄孫とも忌服なし○曾孫玄孫に於ては惣領末子とも忌服差別なし○養實となる時は忌服無之

一從父兄弟姉妹　忌三日　服七日

從父兄弟姉妹とは兄弟姉妹の子相呼て唱ふる稱にて其母方を從母ゟ弟姉妹と云ふ何れも從弟又は從弟女の事なり○父の姉妹の子並母方も忌服仝前○他家相續養子となる時ハ相互に忌服無之○兄弟谷他へ相續養子となり両家にて出生せし子は則從父兄弟姉妹なれども互に忌服なし○父の異父兄弟姉妹の子は忌服なし

一甥　姪　忌三日　服七日

兄弟姉妹の子男子を甥と云ひ女子を姪と云ふ○相續養子の實方甥姪ハ忌服無之○異父兄弟姉妹の子は半減の忌服(二日四日)を受け甥姪よりは伯叔父姑半減の忌服を受く養實となる時は甥姪忌服無之

一七歳未滿の小兒　忌服なし

父母ハ三日遠慮他の親族ハ一日の遠慮日數過て聞及ひ候へハ追て遠慮に及ばす但八歳より定式の忌服可受之

一聞忌之事

遠國に於て親族の死去を聞込たるを聞忌と云ふ父母の死ハ年月を經て知るとも其聞込たる日より更ゝ定式の忌服を受け其他の親族ハ聞込みたる日より殘る日數の忌服を受くべし若し忌の日數過ぎたる時は其日一日遠慮

一重る忌服の事

例へば父の忌服明かざる内母死する時之を重る忌服と云ふ然る時ハ母死去の日より更に定式の忌服ヶ受け重き忌服の内輕き忌服有て日數畢らば追て受くるに及ばず若し日數餘らば殘る日數の忌服を受くべし

一産穢　血荒　流産

明治五年二月大政官第五十六號布告

自今産穢不及憚候事

一死穢　踏合　改葬

明治六年二月大政官第六十一號布告

自今混穢之制被廢候事

明治六年三月廿二日司法省より式部寮へ問合

自今混穢之制被廢候旨過日第六十一號御布告有之候処右混穢と申者忌服中忌の日數相過服日敗中の者又は死穢に觸れ候者改葬主且其事に預り候者或は神事に預り候輩産穢出血殺傷弔喪疾治及び五辛獸肉を食ふの類品々の觸穢の儀と相心得可然儀に候哉承知致度度候條至急御指示有之度此段申達候也

同月廿三日式部寮回答

混穢の儀に付御問合の趣致承知候混穢觸穢ハ同儀に有之混穢と忌服とは別儀に有之候尤死穢以下肉食穢に至り是迄混穢觸穢の儀は総て被廢候事に有之候忌は從前の通服ハ神事にも不及憚儀に有之候へハ自ら消除の姿に有之候依而此段及御回答候也

明治五年六月大政官第百七十七號布告

神社參詣ノ輩自今死穢ニ預リ候者ト雖モ當日ノミ可相憚事

但服忌ノ者ハ從前之通可相心得事

明治六年二月大政官第六十三號達

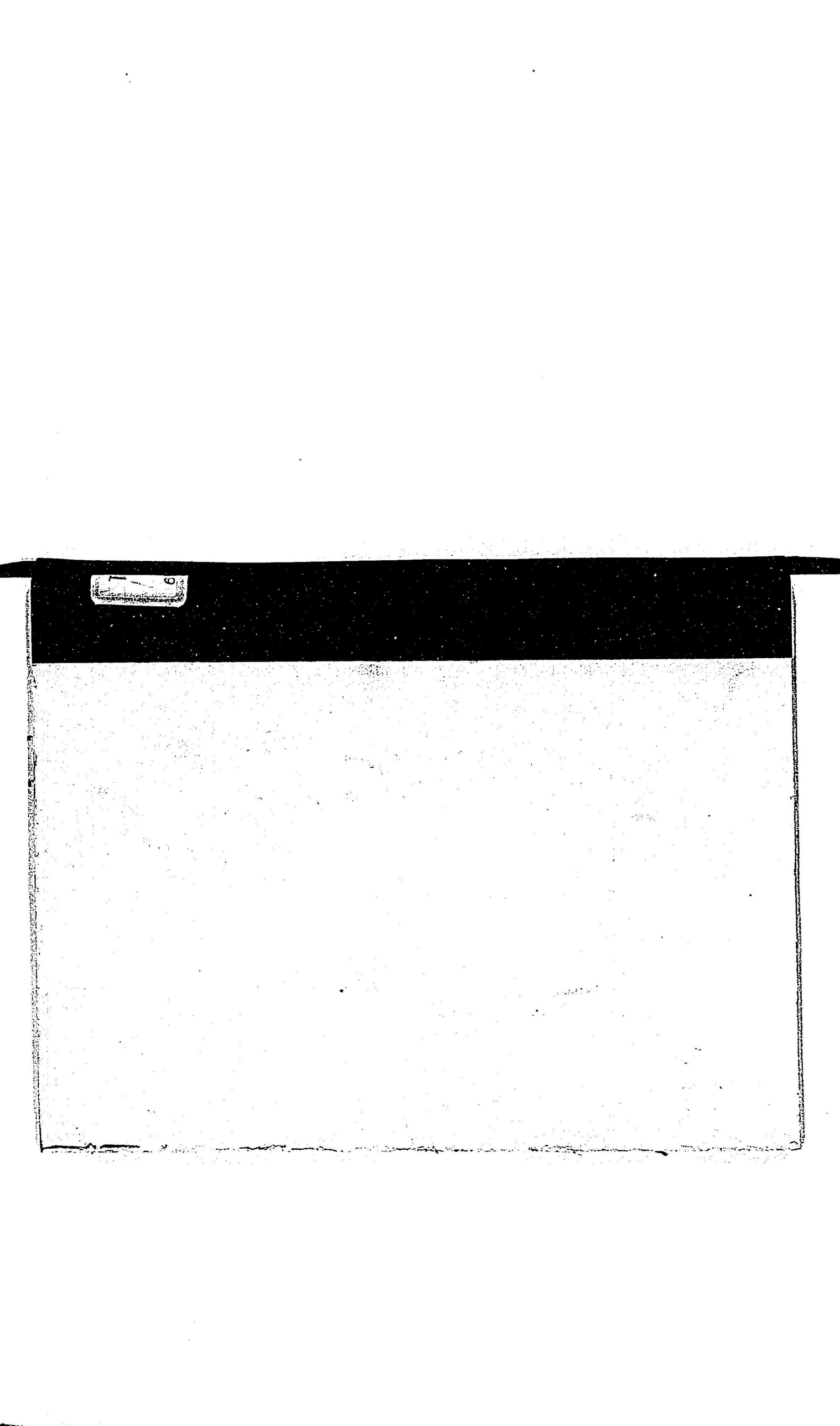
除服出仕宣下候輩自今御祭典ノ節奉仕參拜不及憚候事

但忌明之儀全穢不及憚候事

明治廿三年六月十四日御届
明治廿三年六月十四日出版

編輯兼發行者　徳島縣士族　八木匡則
同縣徳島市大字下助任村貳百八十四番屋敷

印刷者　徳島縣士族　中川瑜
同縣麻植郡桑川村大字川島町九番屋敷



折中喪儀略

八木匡則

国立国会図書館

014318-000-8

特49-931

折中喪儀略

八木　匡則／編

M23

ABB-0663